



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

キリストの聖体 B年 (2021年6月6日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 24章3—8節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 9章11—15節

福音朗読：マルコによる福音 14章12—16、22—26節

## テーマ：いのちの神秘を生きる

### 三つの朗読から

今日の第一朗読を読むと、神さまとの「契約」には三つの要素があることに気づかされます。そもそも「契約」とは、神さまと人との交わりを意味しますが、「契約」を成り立たせる要素がいくつかあります。3節と7節では「主の言葉と法」、「契約の書」が神さまと人の仲立ちとなります。神さまは言葉と法を示す方なのです。人間はそれを聞き、従うのです。「言葉」に引き続いて「契約」の二番目の要素は「犠牲」です(4—5節参照)。どの文化でも「犠牲」は神と人の間で仲介の役割をはたすものです。第三の要素は「血」となります(6—7節参照)。モーセはいけにえの動物から血を採り、半分を祭壇に振りかけ、半分を民全体に振りかけました。血を通じて神と人が一つになるのです。血は、古代の人々にとって神聖なものでした。それ故、祭儀の中で広く使われていました。血はいのちそのものあり、いのちに関係するものはすべて、いのちの唯一の主である神さまとの関係にあるからです。

第二朗読では、旧約のいけにえをささげる場所である聖所と新約の聖所とを対比しています。直前にこうあります。「この幕屋は……礼拝を行う者の心を完全なものにするには力がありませんでした」(9節)。ユダヤ人が慣れ親しんだ「犠牲」を伴う礼拝の儀式は何の力や効力が無いとし、新しい聖所と「犠牲」が必要であることを主張しています。

福音朗読は、受難の物語の始めにある過越祭の食事の場面です。過越祭の食事はエジプトからの解放を思い起こすものでしたが、イエスさまは、さらに死からいのちへの移行の意味を加えます。

## 説教

「キリストの至聖なる御からだと御血」というのが、今日のお祝いの正式な名称となります。多くの小教区共同体では、この日に子どもたちの初聖体を行います。初聖体には、ご聖体を受ける本人が、「ホスチア」と「聖別されたキリストの御からだ」はどちらも同じ食べ物ですが、根本的に違うものなのだという信仰の真実を理解していることが求められます。「ホスチア」は小麦によって作られたパンです。すなわち日ごとの糧です。しかし、ミサの中で「聖別されたキリストの御からだ」は霊的なパンであり、いのちの糧です。この違いを認め、受け入れ、ここから「聖別されたキリストの御からだ」を切望していることが初聖体を受ける子どもたちに求められるのです。

さて、初聖体の保護の聖人は、「聖体の天使」とも称される福者イメルダ・ランベルティーニ(1320-1333)です。女子ドミニコ会の修道院に入ることを望んだイメルダは、当時14歳でなければ初聖体を迎えることができなかつたにもかかわらず、ご聖体のイエスさまを切望し、特別に13歳で初聖体を迎えます。1333年5月12日、主の昇天のミサの中で初めてのご聖体をいただいたイメルダは、そのまま天に召されていきました。この小さな物語は、現代人にとっては奇妙に思えるかもしれませんが。しかし、イメルダはご聖体のイエスさまをいただくことで、ご聖体のイエスさまとひとつになりたいと願ったのです。イエスさまに従い、イエスさまのように生きていく。これがキリスト者が目指す生き方です。そして、イエスさまの十字架に寄り添い、イエスさまと同じように十字架にかけられていく、犠牲としてささげられていく。これこそがキリスト者の生き方の頂点です。少女イメルダは、ご聖体をいただくことを通じて、イエスさまのような生き方を生き抜いたのでした。

聖体拝領の時に「キリストのおんからだ」、「アーメン」と応えます。ここには二重の意味があります。「はい、これは救い主イエス・キリストの御からだです。普通の食べ物ではありません」の意味でのアーメン。そして、「はい、わたしはこのキリストの御からだをいただいて主イエス・キリストのように生きてまいります」の意味でのアーメンです。前者は信仰の真実に同意するアーメンであり、後者は信仰を精一杯生きていく決意のアーメンなのです。「アーメン」と答えて、ご聖体のイエスさまをいただいて、キリスト者は神のいのちを生きていきます。そのいのちとは知識や科学だけでは把握できない、神秘そのものです。願わくは、初聖体の子どもたちが、いのちの神秘を生きていけますように。